

氏名	柳田 健太
学位の種類	博士（事業構想学）
学位記番号	第23号
学位授与年月日	平成30年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学位論文題目	企業組織における知識創造の活性化に向けた情報フローに関する研究 －中小企業の知的資産活用を基に－
論文審査委員	主査 富樫 敦 副査 金子 孝一，島田 達巳，坂本 眞一郎

論文の要旨

高度情報化による市場環境の変化は、消費者の価値観を多様化し、新たなモノやサービスを求める動きを加速させている。そうした変化は、企業間競争を激化させ、ビジネスモデルを抜本的に変えさせるほどの多大な影響をもたらした。今後、企業が存続、発展していくためには、新たな価値あるものを生み出し続けることが必要であるといえる。

こうした現状から、本研究は、企業組織における知識創造の重要性に着眼した。企業組織によって生み出される価値あるモノやサービスは、すべて人によって生み出されるものであり、その源泉となるものは、人に内在する「知識」である。これまで、多くの研究者らによって、知識に関する研究は進められてきているものの、今なお議論がなされている状況にある。近年、知識に関する研究においては、知識を無形の資産として完結させるのではなく、具体的に価値に転換していくための仕組み構築を目的とした議論が進められている。そこで、筆者は、知識創造の活性化に繋がる新たな仕組みを見出したいと考え、本研究に着手した。また、本研究を行う上で、情報フローの概念を一つの柱としている。先行研究において、知識と情報に密接な繋がりがあることや、情報が移転、共有、活用されることによって知識に転換されていくとの見解から、情報の流れを捉えることで、知識創造の活性化に繋がるのではないかと仮説を立てた。

研究の方法としては、はじめに、企業を取り巻く環境の変化から、価値あるものを生み出すことに関わる課題について抽出した。次に、知識創造と情報フローに関する先行研究から、両者の関係性を明らかにするとともに、情報フローを基盤とした知識創造の新たな枠組みを示した。さらに、その仕組みをより具体的な成果に繋げることを目指し、知識創造活動における成果を知的資産として捉えたモデルの提唱を行った。最後に、中小企業を対象とした実地調査を行い、モデルの妥当性について示した。

研究の結果、これまで副次的にしか用いられてこなかった情報フローの概念を体系化し、知識創造との関係性を明らかにした。さらに、知識創造活動を具体的な成果に繋げていくために、情報フローを基盤とした3つの指標と知的資産を用いた新たな知識創造モデルを構築した。モデルの検証を行うにあたり、中小規模の製造業を対象に、実地調査ならびに分析を行った。その結果、知的資産を生み出すために必要とされる3つの指標が全て有意に働いており、モデルの妥当性を示すことに繋がった。以上の内容から、知識創造研究の発展に寄与したといえる。

審査結果の要旨

本論文は、企業組織の知識創造と情報フローの概念を主軸に、知識創造の活性化に向けた理論的な考察ならびにモデルの提唱がなされている。これまで曖昧に扱われてきた情報フローの概念を理論的な視点から体系化し、知識創造過程に応用しようとする試みを随所に見ることができる。また、理論研究から実証までの展開など論文構成も整っており、研究のテーマについて論理的に述べられている点も評価できる。実地調査において、多数の中小企業から得られた回答結果を基に分析されている点も、これまでになく成果であり、新規的な研究であるといえる。よって、本論文は審査に合格する水準に達しているものと評価する。